

淡  
青

t a n s e i

35

2017/09

[特集]

日本各地でローカルに展開される  
研究・教育・社会連携のあれこれ

地域と東大。



東京大学は  
創設140周年を  
迎えました

[巻頭対談]

五神真×有馬朗人

「変革を駆動する大学」をめぐる  
新旧総長トーク

[キャンパス散歩]

駒場リサーチキャンパスの巻



青山 潤／神奈川出身  
大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター  
教授  
Jun Aoyama



## 「知的好奇心」の幟を掲げて 海洋科学の力で三陸の海に希望を

謎の多いウナギの生態を解明しようと世界中を旅してきた海洋学者が、  
三陸の海を見つめながら次の航海へ漕ぎ出そうとしています。その舳先にはためく幟には、  
震災で一度は消えかけた「知的好奇心」の文字が、再び明瞭に染め抜かれています。

大槌町のシンボル「ひょうたん島」。国際沿岸海洋研究センターが奥に見える。

ノベル生理学・医学賞を受賞した大隅良典・東京工業大学名誉教授が、社会の役に立つことを想定しない基礎研究の重要性を指摘したことは記憶に新しい。自身を振り返れば、なぜウナギは旅をするのかという疑問に答えるため、その進化の道筋を皮切りに、世界中の川に海に様々な研究を展開してきた。恩師である塙本勝巳名誉教授が指摘した通り、ウナギは新月の夜、マリアナの海山で産卵するというロマンチックなシナリオを演じていた。産卵に来た親ウナギや天然で生み出されたウナギ卵の採集、新種の発見など、史上初という冠の付く現場に幾度となく立ち会う機会に恵まれた。ただただ知的欲求の赴くまま遮二無二突き進んだ結果だった。それがどう社会に役立つか。言わずと知れた問いかけは耳に届かぬ振りをして、「知的好奇心」と染め抜いた幟だけを掲げていたような気がする。

東日本大震災により壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町にある大気海洋研究所・国際沿岸海洋研究センターへ着任したのは2014年4月だった。津波により1階と2階を完全に破壊されたセンターは、浸水した3階部分を改

修して全力で片肺飛行を続けていた。地元の協力を得ていち早く建造した調査船を駆使し、地震や津波による沿岸生態系の攪乱実態を明らかにするためである。被災地の水産業復興のみならず、同様の災害への備えとなる社会的要請の強い重要な調査・研究といえる。一歩町へ出れば、無残に失われた人命や財産、思い出の強烈な痕跡がそこかしこに残されている。人が、町が、社会全体が忌まわしい記憶を振り切るかのごとく復興へ疾走する地域に、「知的好奇心」という言葉はまったくもってそぐわなかった。あれから3年の月日が流れ、今、空気は少しづつ変わり始めている。復興工事が造り上げたのは津波に耐える町であり、そこに命を吹き込むのは人間であるという当たり前のことが、改めて浮き彫りになりつつある。ようやく中心市街地の整備を終えた大槌町は、想定を大きく下回る住宅再建に四苦八苦している。ここから先は、全国の他の地方と同様、過疎化・高齢化に伴う地域の衰退とどう向き合うかが試されよう。

古来より無限の恩恵と人智を超えた厄災をもたらす海と共に歩んできた三陸沿岸地域。今回の震災を機に海と決別する選択肢などあ

ろうはずではなく、むしろ再び海に希望の光を灯すことこそ急務だろう。岩手県釜石市で「希望学プロジェクト」を展開してきた社会科学研究所は、「希望とは?」という問いに“A wish for something to come true by action”（行動によって何かを実現しようとする情熱）と答えている。単なる食欲や物欲を“希望”と表現することは一般的でなく、ここでいう“何か”とはより高尚なもの、精神的なものを指すと推察する。すなわち、究極的に自身のアイデンティティを守ろうとする情熱こそが希望であると私は解釈している。ならば海洋科学研究の力により、目の前の海に住民が誇りを感じるアイデンティティを構築できれば、この地域に新たな希望が生まれるはずである。そこでは眞顔で夢やロマンを語る純粋な知的好奇心に基づく研究こそ大きな星となるかもしれない。我々は被災地・三陸にある研究機関だからこそ、改めて「知的好奇心」の幟を高々と掲げ、社会科学研究所の力を借りて「役に立たぬ基礎研究」を核とした地域振興を模索しようとしている。名付けて「海と希望の学校 in 三陸」。間もなく開校予定である。

復興が進む大槌湾沿岸。



# 淡青

ta n s e i

43

2021/09

[第一特集]

## 藤井新総長就任

「世界の誰もが来たくなる大学」  
を目指して

[第二特集]

あらゆる生命の故郷にかかる  
研究・教育活動集

## 海と東大。



[アラムナイ通信]

## 東京大学校友会ニュース

[東大の海]

地元と一緒にローカルア

# 海と希望の

古来より海と共に歩んできた三陸。東日本大震災では大洋被災を受けました。しかし震災を機に海と決別するのではなく、三陸の海に對話を取り戻し、地域に希望をもたらす、と社会科学研究会が展開する地域連携プロジェクト

**対話型授業**  
科学的成果だけでなく、地元の話題などを取り上げることにより、積極的に生徒たちの考え方や言葉を引き出します。ひとつずつ事象に根のな視点があることを実感し、海や水などについて再考します。

## 希望の缶詰

将来の自分やふるさとへのメッセージとして、授業やイベントで使用した教材、地元の素材や技術による3作品、手紙などを生話にします。自作のラベルで飾って思いを深めてもらいます。

## 石巻ラーメン

三陸のソウルフードである「石巻ラーメン」。独自の研究により三陸の沿岸生態系が作り上げた食文化であることが見されました。様々な海産物を使いつつ、生徒たちに「石巻ラーメン」を作りもらい、三陸の海について語めて考えてもらら授業を構築しました。

## 大槌高校「はま研究会」

「海で遊ぶ、海で学ぶ」をコンセプトに大槌高校に設置された研究会。放課後、生徒たちが研究室で学びを深めています。大槌高校の生徒全国募集「はま留学」にも活用され、首都圏から入学して活躍している生徒もいます。

みんなでつく  
大槌湾マップ

タッチパネルと  
オサガメの劇場

タッチパネル式  
生き物図鑑

ウミガメ水槽

## おおうち海の

海と地域、大学と社会を  
開拓した新しいタイプの  
施設です。



## On 三陸

震災以降、三陸沿岸の希望の象徴となつて  
いる三陸鉄道と協働して、車窓に海を見ながら  
ふるさとを学ぶ学習・イベント列車を運行しています。

プロジェクト、1】

イデノティティを再構築

# 学校 in 三陸

津波には甚大な  
被害があり、  
大槌海岸駅所  
です。

大槌港の生物  
メイン解説コーナー

石巻活動  
紹介コーナー

## 岩手日報連載 と書籍化

2014年から2020年まで計50回にわたり、  
岩手日報ジャーナルクリーに「さんりく海  
免強室」を連載してきました。これら一部  
に、社会科学に関する書下しを加え  
「さんりく海の免強室」(2021年4月  
岩手日報社刊)として出版しました。  
ジャーナルクリーは新連載「メコの  
さんりくビミナル」をスタートしています。



きのしたちみ3 / イラスト  
国際沿岸海洋研究センター  
特任研究员  
Web: lunlundi.com



## 塩づくり

豊富な三陸では、古くから「海水醸製塩」  
が行われてきました。「新巻塩」は三陸の  
塩と河川へ通じるサケそして冬の吹いた  
風が作り上げた食文化です。直営製塩を  
体験しつつこの風土や文化について学ぶ  
授業を実施しています。



## オオヨツハモガニ

三陸を代表する新種のかは大槌湾で発見されました!  
地元のプラスチック加工業者と、発見きっかけと  
なった「オスのハサミ」をモチーフに  
したグッズを開発し、町の新たな  
シンボルを目指しています。



大槌湾で新発見!!



## 免強室の内部

届ぶハグ2021年に  
展示・研究

## 北地 地図

海に親しんでもらうことを目的に、  
地元の方などと協働して地図  
イベントを実施しています。

## 天井画

東京都東久留米市民の皆さん  
のご支援により、現代アート作家の  
大山眞木さんが国際沿岸海洋研究センターの  
エントランスに海の天井画「生きのチカラ」  
を描いてくださいました。生きの子供達を  
描いて天井画を眺めながら美術館ごも、  
理科でも、社会でもない「生きの子の海」の  
授業を行っています。